

数学を発信すること：『数学セミナー』の編集を通して

(株) 日本評論社『数学セミナー』編集長 大賀雅美

(2007 年 11 月 2 日講義用資料)

『数学セミナー』の歴史

『数学セミナー』の創刊は 1962 年 4 月、今年 (2007 年 5 月号) で 45 周年です (ちなみに、11 月 12 日発売の 2007 年 12 月号で通巻 555 号)。

創刊時より遠山啓先生、矢野健太郎先生のお二人が編集委員として参画。1993 年 3 月号まで表紙に「遠山 啓 + 矢野健太郎 = 創刊」の文字が入っています。編集委員には途中から、赤堀也先生と清水達雄先生が加わり、1990 年代初頭まで参画されました。

遠山・矢野両先生がどのような思いでこの雑誌を作られたかは、創刊号の巻頭にある遠山先生言葉に読み取ることができます。

「数学は雲の上の仙人のやる学問だ、というのがこれまでの常識だった。

ところが仙人ならぬ生きた人間が雲をつきぬけて月までも、金星までも行けるようになった今日では、数学も仙人の学問ではなくなって、生きた人間にとって欠くことのできない知識となってきた。

実生活のほう数学に近づいてきたのか、それとも数学のほう実生活に近づいてきたのか、おそらく両方だと思うが、数学と実生活の接触点はこれまでに大きくなってきた。(中略)

この雑誌は数学と現代文化や現代生活との接触から生ずる多種多様な問題を積極的にとりあげて行くようにしたい。(中略)

この雑誌はそうした (= 遅ればせながら数学を学びなおしたい) 人々の役にも立つようにしたい。(中略)

この種の雑誌はこれまで日本になかった。

したがって他人の真似で編集していくことはできないので、むづかしい点は多々あるだろうが、その反面、型にとらわれない思い切った編集方針がとれる。そういう有利な点を生かして現代の要求に応ずる清新はつらつたる雑誌にしていきたいと願っている。」

(『数学セミナー』1962 年 4 月号 1 ページ「数学と現代文化——創刊のことば」より)

現在も、この創刊のことばに大幅に逸脱しない程度の自由な発想で雑誌を企画・制作しています。

『数学セミナー』の初代編集長は女性で、創刊時より 13 年間雑誌の編集に携わってこられました。また、この 45 年のうち、女性の編集部員がまったくいないという時期も少なく、仕事をするときも性差を特に意識させられたことはありません。

編集部は現在、編集長 1 人 + 編集部員 2 人 = 計 3 人で企画・依頼・編集・制作を行っています。

『数学セミナー』ができるまで

『数学セミナー』の記事は

- 特集
- 単独記事
- 連載
- 定期コーナー (= apéritif / エレガントな解答をもとむ / 数セミブック・プラザ など)

の大きく 4 種類に分かれます。

n 月号の特集や単独記事は $n - 4$ 月上旬までに決めて依頼をします。

特集は

- どんなことがやりたいか
- どうしてそれをやりたいか
- どんなラインナップにすればよいか
- 執筆者は誰がよいか

といったことを話し合います。『数学セミナー』では、基本的に企画原案(どんなことがやりたいか)を出し合い、それぞれについて話し合いながら共通理解を深め、その上でラインナップを決めていきます。また、内容によっては、その専門の先生にご相談をし、ラインナップなどを決めることもあります。

単独記事では、最近のトピックスや、興味はあるが特集という形では難しいと判断したもの、特集と関連のある話題などを取り上げます。

連載は毎年 8 ~ 9 月に話し合いをし、全体の構成を決めていきます。

雑誌の制作は概ね次のような流れで進みます．

n 月号の特集や単独記事は $n-4$ 月上旬までに決め、 $n-4$ 月中旬くらいまでに依頼をします．

↓

$n-3$ 月末には原稿が届きます．通常、 $n-3$ 月末が原稿の締切になります．

↓

原稿のチェックを済ませて、 $n-2$ 月10日くらいまでに原稿を印刷所に入稿します．

↓

入稿から4,5日で初校がでてきます．

↓

著者と校正のやりとりをします．

↓

編集部内で自分の担当外の校正刷りを読みあいます．『数学セミナー』では雑誌が校了(制作終了)するまでに、編集部全員が全ページを読みます．

↓

$n-2$ 月25日前後の2日間、出張校正(印刷所に行って作業をすること、いわゆる「カンヅメ」)を行い、雑誌を校了をします．

↓

校了の2日後に「白焼」(ページどおりに並べられた、雑誌の原型のようなもの)で最終チェックをします．

↓

$n-1$ 月9日くらいに「見本」ができ、 $n-1$ 月12日に雑誌が店頭にならびます．

企画をする上で気をつけていること

企画するときに特に気をつけることは「雑誌は学ぶきっかけを作るもの」ということ．雑誌なので、いろいろな分野、レベル、読者対象の記事があってよいと思っています．1年を通して、それぞれの興味やレベルで面白がってもらえる記事が掲載できるようにしたいと常に考えています．また、数ページの記事で「すべてがわからないからだめ」ではなく(そういうお叱りも読者の方からいただくことがあります)、その記事から自分の興味の方向性を見つけてもらえるように、依頼などのときにその点を特にお願いしてお書きいただく記事もあります．

数学は自分の手を動かし考えて身につけていくものですので、大学新入生をターゲットにした特集など(たとえば、毎年4,5月号)では、「手を動かすこと」を意識した企画も考えたりしています。

ほかに、「編集部員は数学の素人である」という意識で取り組むことも大切なことです。学生時代に数学を学んでいますが(数学科出身でない編集者もいます)、「素人目線＝素朴な疑問、躓き」から企画に発展することもあります。数学者の先生方にお話を伺うときも、その姿勢を忘れないよう、心がけます。

だんだん『数学セミナー』の話から離れていきますが...

ここからは、独断と偏見に満ちた「経験談＝単なる雑談」ですので、今まで以上に気楽に聞いてください。質問(という名のツッコミ)也大歓迎です。

余談その1：編集者に必要と思われる素養

まず、いろいろな分野に興味をもつこと。これまで数学を勉強するときには「いろいろと目移りするのは良くない」といわれたことがあるかもしれませんが、「これ、面白そう!」と思った分野に注目して企画を立てるということは、編集者にとっては大切なことだと思います。

また、こだわりを持つこと。これは仕事に限らず、ですが、趣味や食べ物の嗜好などでこだわりを持つことは、実は雑誌作り・本作りに大切な要素です。出版の仕事は2002年まで「製造業」に分類されていた(それ以降は放送業や情報サービス業と併せて情報通信業として区分されている)こともあり、「ものづくり」へのこだわりを持った編集者は多いです。(たとえば、数式部分の文字間のアキが0.数ミリ違うから...、とか、図の文字の大きさ・線の太さが...、とか、誌面を美しく見せるための「こだわり」を持った人もいます。)

余談その2：学生時代の専門(数学)は仕事にどの程度生かされているか

答え:「生かされているといえばそうだけれど、生かされていないといわれてもそうだ」。

学部3年くらいまでに学ぶ数学の基礎的な内容と数学的なものの見方・考え方は常に仕事に生かされていると思いますが、学部4年や大学院でやった専門的な数学を駆使することはまずありません。これは、雑誌の仕事に限らず、研究職以外のほとんどの仕事でそうではないかと思われます。しかし、いまの企業が数学出身者に求めているのは、数学を学んで習得した「ものの見方・考え方」だといわれています。

ある大学で行われた「長期インターンシップ」の取材をしたときに、「物事の本質を見極めようとする姿勢に感心した」「数式に対する野生的ともいえる直観力は技術系にはないものですごい」というような話を企業の人から聞くことができましたが、数学科出身者に求められているものはこれではないでしょうか。

余談その3：パソコンのスキルはどの程度必要か

数学科では $\text{T}_\text{E}\text{X}$ は必要不可欠なツールで、理科系出版社でも $\text{T}_\text{E}\text{X}$ で単行本を作るところがほとんどですが、一般企業では Word, Excel, PowerPoint のほうが必修のようです。余談ですが、派遣会社などに登録する場合は、Word, Excel の基礎知識と簡単な実技の試験があるそうです。

ちなみに、『数学セミナー』を作っている印刷所のシステムは $\text{T}_\text{E}\text{X}$ と互換性がないため、いまでも数式部分は手組み(印刷所の人が記号や文字を一つ一つ入力する)で作業されています。現在、原稿の形式の比率は $\text{T}_\text{E}\text{X}$: Word : 手書き = 7 : 2 : 1 くらいです。

また『数学セミナー』の図版は、基本的に Illustrator を使って制作します。小社では図版担当のスタッフが制作に当たりますので、編集者全員が Illustrator を使いこなさなければならない、という状況ではありません。

余談その4：女性の社会進出についての私見

- 男女雇用均等法
- 女性と病気
- 恋愛・家庭と仕事は両立できるか